

令和3年度第2回埼玉県立近代美術館協議会会議録（抄録）

- 1 開催日 令和4年3月11日（金）
- 2 時間 午後2時00分～午後3時30分
- 3 場所 オンラインによる開催
- 4 出席委員 松岡滋 岡野啓子 青木聖吾 井口壽乃 近藤博英 齊藤政春
樋口昌樹 三上豊 山田志麻子
- 5 欠席委員 有田るみ子 中川昇次 相馬千秋
- 6 事務局出席者 館長 建島哲
副館長 佐藤慶朗
教育主幹 田柳宏
学芸主幹 平野到
担当課長 矢嶋梨恵 田中孝佳
- 7 教育局出席者 なし
- 8 進行の概要
 - (1) 開会
 - (2) 館代表者挨拶（建島館長）
 - (3) 会議録署名委員指名
会長から署名委員として井口委員、近藤委員が指名された。

9 議事の内容と質疑応答

(1) 報告事項・意見

ア 令和3年度事業報告

事務局から会議資料及び映像を使用して、常設展示事業、企画展示事業、美術作品収集事業、一般向け普及事業、美術館の利用促進事業、子供向け事業、学校との連携、ボランティア活動、「椅子」の有効活用、一般展示室の利用状況、入館者数について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 美術作品収集事業について、孫雅由という作家の作品を多く受け入れるとの説明があったが、簡単でよいので孫雅由のプロフィールを伺いたい。

事務局 孫雅由は主に関西で1970年代以降に活動していた美術家である。若い頃に上京し、高山登氏のもとに通い教えを受け、当時は身体表現を中心とした活動をしていた。その後、徐々に実験映画や版画など、非常に思索的な作品を制作していた。また、郭仁植のような在日韓国系の作家とも交流があった。当館としては1970年代の作品の収集に力を入れてきたので、それらと連動する形でいろいろと展示ができるのではないかと考え、収集することとしたものである。

美術館 1点補足させていただく。同氏の作品を寄贈したのは河正雄氏という在日韓国人の方である。同氏は在日韓国人作家の作品を継続的に集めている方で、光州市立美術館にも多くのコレクションを寄贈している。同氏は埼玉県に在住しているため、そのような縁もあって、大事にコレクションされていたものを当館に寄贈していただくこととなった。同氏のコレクションは、作家の選択も非常にクオリティが高く、我々も非常に嬉しく思っている。

委員 非常に素晴らしい作品だと思うので、今後、展覧等の企画をしてもらえればと思う。

イ 令和4年度事業計画

事務局から会議資料及び映像を使用して、常設展示事業、企画展示事業、美術作品収集事業、普及事業、美術館の利用促進事業、子供向け事業、学校との連携、ボランティア活動、「椅子」の有効活用について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 埼玉大学との事業連携についてだが、同大の教養学部が中心となって、ミュージアム・カレッジというものを開催している。県立歴史と民俗の博物館と近代美術館とで隔年で実施しており、令和4年度は近代美術館で開催を予定しているので、事業計画に記載してはどうか。

事務局 昨年度は新型コロナウイルスの影響により開催出来ていなかったが、来年度は開催したいと考えている。プログラムに関しては、いろいろと御指導をいただければと思う。

委員 戸谷成雄展の作品数17点というのは少ないと感じている。資料的なものも展示していただければと思う。

また、現在開催中の開館40周年記念展「扉は開いているか」の図録であるが、1章、2章がモノクロとなっている。全ページカラーでよかったのではないかと思うが、何か理由があるのか。

事務局 戸谷成雄展については、担当が作者と協議を重ねていて、現在のところ大型の作品が17点となっている。その他に委員が述べたように、いろいろな資料や野外で行った展示記録などがあるので、それらを精査した上で、展示に盛り込むことで担当者が調整中である。

開館40周年記念展の図録について一部がモノクロとなっているものは印刷費用の制約によるものである。今後は、できればカラーで記録を残していけるように調整したい。

委員 以前、「NEW VISION SAITAMA」という年齢層も様々な埼玉にゆかりのあるアーティストを扱った展覧会が不定期で開催されていたと思う。アーティスト・プロジェクト以外に、このような埼玉ゆかりのアーティストを取り上げて広く展覧会をやるというような事業を行う予定はないのか。

事務局 「NEW VISION SAITAMA」は定期的で開催すると、いずれ形骸化してしまうのではないかという当時の担当者の思いがあり、条件が揃った時に開催することにしたほうが内容に実りがあるのではないかと考え、不定期開催という形をとっている。事業を止めたわけではないので、スタッフの調査が

進み、条件が整えば継続していきたいと考えている。その他にも、埼玉県内には非常に優秀な美術家が活動しているので、そのような方々を対象に、個展に限らず、いろいろな組み合わせで展示を行っていくことについて、学芸部で議論しているので、今後、そのような機会を積極的に考えていきたい。

委員 埼玉は作家が多いと思うので、選定も広範囲になると思うが頑張してほしい。

ウ 博物館評価について

事務局から会議資料を使用して、令和3年度の評価について報告を行った。

【主な質疑応答】

委員 コロナ禍において、特にボイス・パレルモ展などは海外からの作品借用もあり、大変苦勞されたのではないかと思う。また、タイガー立石展ではうらわ美術館と同時開催したが、両館の特性がクリアに出ていて、これまでのタイガー立石展とは違った面が照らし出されていたのではないかと思う。

40周年記念展の図録を拝見したが、改めて開館当時の蓄積が、非常にリアルに伝わってきた。展示は、館長、学芸員の地道な調査と、コレクターや遺族、作家との関係性が非常によく出ていて、すごく重みのあるものとなっていた。図録を拝見して改めて思ったのは、建物の様子が展示によく出ていたということである。普段は感じていなかった設計当初のピロティや屋外彫刻など、外部との関係性、空間的な関係性がすごく感じられた。

最後に質問であるが、コロナ禍で大変苦勞されていると思うが、特にワークショップなどでの感染防止対策としては、人数制限が主なものであったのか。例えば、場所を屋外に移したり、プログラムを変えたりしたことはあったのか。

事務局 コロナ対策としては、広いスペースが確保できる場所で実施したり、鑑賞の仕方を変えるなどの工夫を行った。鑑賞の仕方を変えることについては、従来は現場で対話型の鑑賞を行っていたが、屋外の彫刻を活用したり、モニタを活用して事前に話し合いを行い、現場では対話はできないが、本物の作品を見るという流れにするなどの工夫を行った。その他、定員をかなり減らし、少人数となるように配置を工夫したり、講堂などの広いスペースで十分な間隔を確保できるようにするなどして実施している。成果物の鑑賞でも、従来は全員で話し合いながら行っていたが、距離をとって鑑賞してもらうなど、感染防止に配慮している。

議長 美術館としては、何か意見をもらいたい点はあるか。

美術館 地域の美術館と連携して事業を実施することは重要だと考えており、これまでも瑛九の展示をうらわ美術館と開催するなどしてきた。今年度はタイガー立石展を実施し、アンケートでもいろいろと御意見をいただいているが、委員の皆様にも何か御意見があれば、次回の参考としたいと考えているが、いかがか。

委員 一般のお客様からすると県立の美術館も市立の美術館も関係なく、埼玉にある美術館として来館する。さいたま市文化芸術都市創造審議会の会議において、県と市の施設が連携しあいプロジェクトを進めていくことが、将来的な街づくりによいだろうという意見があった。その点からも両館が連携して、いろいろな取組を行っていくのはよいことだと思うので、前向きに推進してほしい。

事務局 タイガー立石展の際は来館者から、1枚のチケットで2館を巡れないのかという指摘があった。大きなハードルがあるが、将来的にはできるような仕組み作りを考えていかなければいけないと思っている。

美術館 委員から意見があれば伺いたいのだが、コロナ禍で閉館を余儀なくされたときに、多くの美術館でオンラインによる発信が行われ、開けられない展覧会をストリートビュー形式で紹介し、リアルな展覧会を回るような形で体験させるということを行った。私もいろいろ拝見したが、オンラインによる展覧会の発信はなかなか難しいと感じている。今後、新型コロナウイルスの感染状況がよくなるのか、現在の状況が続いていくのか、それとも爆発的な感染が起きてしまうのかなど予断を許さない状況であるが、美術館はオンラインによる発信を積極的に行っていくべきなのか、それとも、オンラインと両方による発信をしつつも、オンライン展に置き換えることは避けた方がよいのかを考えている。例えば、県展は昨年度から新型コロナウイルスの影響で開催されていないが、サイト上で作品を公開する取組を行った。私も依頼されてコメントを寄せるなど多少携わったのだが、リアルの美術館に関わるのが長かったせいか、オンラインのみの発信は辛いと感じた。委員の皆様からも意見などあれば聞かせていただきたい。

委員 最終的には実物を見るというのは必要なことで、オンラインは補完的な作業に過ぎないと思っている。リアルな作品と身体的に関わり合う、空間を共有するというのが美術鑑賞だと思う。大学の授業などはオンラインで行われていて、美術館もオンライン展覧会というのがあるが、オンラインが一番優れているのはシンポジウムやレクチャーみたいなものである。参加人数を絞

り、20から30人は実際に会場に来るが、残りはオンラインで配信するなどの形式で実施することができる。オンラインだと、わざわざ行かなくて済むということで参加者がすごく増えているということは、よく聞く話である。

ただ、情報発信においてはオンラインがすごく有効な方法だと思う。仮にコロナが悪化し、休館せざるを得ないという時に展覧会をオンラインで見せるというのは、どうしても二次元的な密度の低いものになってしまうと思うが、例えば、収蔵品などを1点1点、カメラで寄って撮影し、それに対し学芸員が作品解説的なことをしていくような、展覧会とは違った情報発信というやり方ならば、逆にオンラインのよさが生きるのではないかと思っている。

美術館 大学の講義などは多くがオンラインに移行し、今後もこの流れが続いていくと思われるが、展覧会については戻っていききたいというのが正直な思いである。シンポジウムについては、実際のところ50人しか聞けないものを1万人が聞けるようになったり、国際シンポジウムでは旅費や宿泊費が不要となり、格安で参加できるようになる。委員の御意見は、そのようなメリットは生かしていくべきだというものと受け止めている。

委員 アナログ世代からすると90年代後半からコンピュータが導入され、現在、オンラインという世界に向かってきているところだと思うが、今の10代の子供たちというのは、元々、ゲームなどでオンラインから入ってきている子供が多いと思う。その子供たちにとっては、美術館のサイトからオンラインで入ると、それをきっかけに興味をもってもらえる可能性がある。美術館で構えて広報するよりも、双方向的にハイブリットにいろいろな世代に発信できるというのがオンラインの可能性であると思う。今後、コロナ禍でオンラインによるバーチャル・リアリティは、どんどん発達してくると思う。オンライン展覧会はゲームを楽しむ感覚に似た部分もあり、このような部分が双方向的に発展していけば面白いのではないかと思っている。

委員 横田茂ギャラリーの例であるが、展示は平日の4日間しかできず、お客様をいれることもできなかつたため、ギャラリー内に関係者のみ集め、ミニシンポジウムを開催し、その様子を作品とともに撮影し、Youtubeで配信するという取組を行った。これは意外と簡単で、これにより大勢の方に見てもらうことができた。今後はこのような取組がどんどん増えていくだろうと思われる。ただし、手間がかかるので、美術館のスタッフは大変忙しいなか、どれだけできるのか課題ではある。全体的には将来的に増えていく傾向にあると思われる。若い人は、ものすごく早く情報をキャッチする。ネットの情報は膨大にあるが、若い世代はリテラシーが進んでいるので、ぜひ、やっていくべきだと思う。

また、実際に美術館に足を運んでもらうためのひとつの手立てとして、駅

に県の文化施設が合同でモニタを設置して、現在やっている展示を紹介するという取組はいかがか。映像の活用というのは社会教育だけではなくて、街づくりにも還元できると考える。どれだけ実現できるかは難しい部分があるが、県の博物館など、文化施設、さいたま市も一緒に、将来を見据え検討していくことが必要と考える。

委員 先日、オンラインで移住・定住セミナーを行った。平日は多い時に100人程度の方に視聴してもらっていたが、Facebook等のアーカイブに載せたところ、1週間で800人ほどのフォロワーがついた。美術館でもFacebookやYoutube等で展示や収蔵品の発信を工夫してもらえればと思う。アナウンスの仕方を工夫することで多くの人に美術館を知ってもらい、多くの素晴らしい作品を見ていただくことは、十分可能だと思うので参考にしてもらえればと思う。

委員 評価の最後のページに、「広報や割引制度などで密な連携をはかり、実績に繋がった」とあったが、このような分析が非常に大切だと感じた。

また、先日、家庭教育振興協議会でオンラインによる研修を行った。現地には20人程度が集まり、ほとんどの方はオンラインで参加した。子育て世代の方は、もちろん、スマホで簡単に参加できていたが、お孫さんがいるような世代の方も参加することができていた。これは、研修を行う前に、ZOOMの研修を行ったためである。丁寧に教えてあげることで、1度参加すれば、以降も参加してもらえるようになる。このようにオンラインが苦手な人にもアウトリーチ的なものを考えてあげるとよいのではないかと考えている。

(以上)

(議事録署名者)

会 長

委 員

委 員
